

県医師会の動き

副会長 吉本 正博

1月10日から今冬一番の寒波が日本全国を襲いました。「西郷どん」放映開始で沸く鹿児島市内も、南国には珍しい雪景色になったとニュースで流れていました。14日と15日に行われたセンター試験は北陸、東北では雪のために公共交通機関の遅れが出て、開始時間を遅れさせたり等の対応をとった会場もあったとのこと。また、インフルエンザも猛威を振るっています。A型とB型が同時に流行するなど、近年にない現象が起こっています。受験生にとっては、まさに試験のストレス、寒波、インフルエンザと三重苦になっています。昨年も全く同じことを書きました。何とかならないものでしょうか。

さて、1月号の本コーナーがお休みだったので、今月は11月中旬から1月中旬の行事が対象となります。

郡市医師会学校保健担当理事協議会・学校医部会合同会議を11月16日(木)に開催しました。その中で現在「蛋白、潜血、糖いずれか1項目で(±)以上」となっている学校検尿の精密検査基準を、「蛋白、潜血いずれか1項目で(1+)以上、糖が(±)以上」と変更することが決定されました。また、会の中で、ヘリコバクター・ピロリ菌の検査を前向きに検討してほしいとの要望が出されました。神奈川県医師会が横須賀市、藤沢市、厚木市の中学2年生の希望者を対象にピロリ菌検査を実施しているとのこと。山口県の場合、県医師会予算でというのは難しいと思いますが、十分検討に値する意見だと思います。

11月16日(木)には山口県庁で山口県看護職員確保対策協議会が開催され、沖中芳彦 常任理事が出席しています。看護学生の就職等に関する

アンケート調査結果が報告され、回答のあった1,159名の71.5%が「就職先として山口県を優先する」としているとのこと。しかし、逆に考えると330名が県外に転出するということになります。また、修学資金の返還免除要件である「200床未満の病院」を「すべての県内病院」に変更した場合、修学資金非利用者の41%が「利用を検討する」と回答しています。県医師会では県に対して要件の緩和を要望しているところで

11月18日(土)に三重県津市で開催された全国学校保健・学校医大会並びに都道府県医師会連絡会議に濱本史明 副会長と藤本俊文 常任理事が参加しました。詳細は本号に掲載しています。

11月18日(土)と19日(日)の2日間にわたり医療対話推進者養成セミナーを日本医師会及び日本医療機能評価機構と共同で開催しました。参加者は32名で9時から17時まで講義の他、計4回のロールプレイがあり、結構大変なセミナーだったようです。福岡県と兵庫県からも参加がありました。今回のセミナーは基礎編でしたが、今後、導入編のセミナーも開催したいと考えており、その際には病院の幹部クラスの方々にも是非参加していただきたいと考えています。

11月19日(日)開催の山口県医師会生涯研修セミナーは非常に興味深く有意義な講演であったと思うのですが、参加者が54名と少なかったのは残念です。平 孝臣 東京女子医科大学脳神経外科臨床教授による「脳神経機能外科の進歩」、坪井一哉 名古屋セントラル病院ライソゾーム病センター・血液内科主任医長による「日常診療に潜む

ライソゾーム病ー見逃さないためのポイントー」、菅一能 セントヒル病院放射線室長による「PET検査がどう役立っているか?」、吉村清 国立がん研究センター先端医療開発センター免疫療法開発分野長による「今、がん免疫療法に何が起きているのか?ーがん治療の新しい流れー」といった講演は、製薬会社が主催・共催する講演会では決して聴くことはできないだろうと思います。

11月21日(火)には河村康明 会長が山口大学医学部4年生約100名に対して講義を行いました。昨年に引き続き2回目です。医師会の取り組み等について説明した後、ご自身の経験談として配偶者とうまくつきあう方法、自身で栽培したパイナップルやメロンのスライドを示しながら、趣味を持つことの大切さについて、ユーモアを交えて話をしたとのことでした。

11月22日(水)に都内の憲政記念館で開催された医療関係団体など40団体からなる国民医療推進協議会主催の「**国民医療を守るための総決起大会**」に河村会長、林弘人 専務理事、今村孝子 常任理事、中村洋 理事、市原栄一 事務局長とともに参加してきました。憲政記念館は座りきれないほどの多数の参加者があり、盛り上がりました。自民党議員を代表して高村正彦 副総裁、公明党議員を代表して榎屋敬悟 副代表が挨拶をされましたが、2人とも山口県出身であり、少し誇らしい気分でした。与党だけでなく、野党からも多数の議員が顔を見せていました。

11月23日(勤労感謝の日)は恒例となった山口県医師国民健康保険組合主催の「**第16回『学びながらのウォーキング』大会**」が秋吉台であり、老若男女65名の参加がありました。この日は寒波襲来で例年に比べ気温が低く、昼食会場の展望台は景色は素晴らしかったものの、冷たい強風が吹きまくり、昼食時間を早めに切り上げてウォーキングに入りました。しかし、ススキが一面に広がった秋吉台は、やはりとても素晴らしい場所でした。

山口県医療事故調査合同協議会を11月25日(土)にホテルかめ福で開催しました。河村会長の挨拶、林専務理事による「医療事故調査制度の現状について」の講演の後、和田仁孝 早稲田大学大学院法務研究科教授による特別講演「医療メディーエーション(対話による紛争調整)」がありました。医療メディーエーションとは、対立する患者側と医療側当事者に対して、中立的第三者としてのメディーエーターが向き合う場を用意し、聞き役・説明役として問いを投げかけ受け止めてあげることで対話を支援(ナビゲート)し、自分たちの手で合意形成へと至らせる仕組みです。医療メディーエーターの養成を中心となって行ってきた和田教授の講演は非常に有意義で、あっという間の1時間30分でした。

11月26日(日)には**母体保護法指定医師研修会**が開催されています。指定の申請、更新のためにはこの研修会を受講することが求められており、受講者は57名で、うち5名は県外からの受講でした。

平成29年度第2回郡市医師会地域医療担当理事協議会が11月30日(木)に開催されています。第7次山口県保健医療計画(素案)、第2回療養病床転換意向等調査の結果、「5疾病及び在宅医療」の医療機関リストの作成についての説明等が行われました。

毎年開催している**花粉測定講習会**を12月10日(日)に開催しました。沖中常任理事による講演「平成29年のスギ・ヒノキ花粉の飛散のまとめと平成30年の飛散予測」、日吉正明 花粉情報委員長による講演「春に見かける花粉」の後、特別講演「最多風向によるヒノキ科花粉供給地域の推定と飛散状況」を松山大学薬学部臨床薬学研究室の難波弘行 教授に行っていただきました。19年間にわたって前年6~9月の最高気温平均値、降水量とスギ・ヒノキ花粉の飛散数の検討を行い、前年7月の最高気温平均値と降水量が花粉の飛散数と強い相関があることを見つけています。また、花粉の飛散数が多い日の最多風向の検討から、

愛媛県内の花粉飛散の発生源を推測する研究成果等の説明がありました。これらの成果を応用することにより、今後の飛散予測の精度がさらに向上することが期待されます。

12月14日(木)、平成29年度第3回健康教育委員会が開催され、今年度の健康教育テキスト「食物アレルギー」の最終校正が行われました。今回のテキストは会員医療機関だけでなく、保育園・幼稚園・小学校(合計660施設)にも各2部ずつ送付されることになっています。また、来年度のテキストのテーマが「リウマチ」に決定されました。

12月15日(金)に山口県立総合医療センターで開催された第2回山口県専門医制度協議会に山下哲男理事が出席しています。専門研修プログラム1次登録に山口県からは19領域29プログラム(定員161名)が申請され、すべて承認されたとのことです。現在までに13プログラムに44人の応募があり、そのうち38人が県内の初期臨床研修医で、県内の2年目の研修医76人の50%に当たります。県外転出を防ぐためにも魅力あるプログラム作りが必要と思われます。

12月17日(日)に山口県医師会禁煙推進委員会が企画・運営を行った第1回山口県禁煙フォーラムが開催されました。北九州市の津田徹霧ヶ丘つだ病院院長による特別講演「禁煙で“いのち”を守りたい—自分だけでなく、周りの人も—」並びに禁煙推進委員によるパネルディスカッションのほかに、看護協会、臨床検査技師会、歯科医師会、薬剤師会の協力を得て、検査コーナーや健康相談コーナー、展示コーナーが設けられました。

12月19日(火)には「**県民の健康と医療を考える会**」総会が開催されました。持続可能な社会保障体制の確立と、医療費削減政策等で疲弊した地域医療提供体制の再構築に向けて、国民が将来にわたり必要な医療・介護を安心して充分に受けられるための適切な財源の確保、国民と医療機関等に不合理な負担を強いている医療等に係る消

費税問題の抜本的な解決を求める決議案について協議を行いました。県医師会からの趣旨説明の後、県歯科医師会、県薬剤師会、県看護協会の各会長から賛同の意見が出され、決議案は採択されました。決議文は県選出国會議員、県知事、県議会議長に提出しました。

12月27日(水)に県庁で開催された山口県医療対策協議会医師配置調整部会に河村会長が出席しています。この部会は修学資金等を貸与されている医師の配置調整を協議する会議です。平成28年の山口県の医師数は平成26年に比べて11人の減、特に45歳未満の医師は65人の減となっています。平成10年と比べると医師数は218人増加しているものの、45歳未満の医師は441人減少しているとのことです。会議では山口大学医学部の入試制度(地域枠、社会人枠、推薦入学)や、卒業時に貸与された修学資金を一括返済する修学資金貸与者についての議論がなされたとのことです。


1月6日(土)には第13回医療関係団体新年互礼会、7日(日)には広島県医師会との懇談会が開催されましたが、体調不良のために私は出席できませんでした。互礼会には昨年に引き続き横倉義武日医会長、また、今回初めて堀憲郎日歯会長にも出席していただきました。広島県医師会との懇談会では、当県提出の「平成28・29年度社会保険診療報酬検討委員会答申(案)におけるICTの活用と遠隔診療について」及び「働き方改革—勤務医師の時間外労働規制について」と、広島県提出の「保育サポーター事業の取組状況について」の協議が行われました。

雪の舞う1月11日(木)に開催された定款等検討委員会では、「平成31年度山口県医師会会費の賦課方法について」と「平成31年度役員等の報酬について」が諮問され、了承されました。いずれも今年度と変更がありません。なお、6月開催の定例代議員会で承認が必要なため、平成30年度ではなく31年度となっています。

1 月 13 日（土）には日医生涯教育協力講座セミナーが開催されました。今回のテーマは「超高齢社会における高齢者のトータルケア」で、中村幸男 信州大学医学部附属病院整形外科講師による特別講演「長野県におけるロコモへの取り組み」、小川純人 東京大学大学院医学系研究科加齢医学准教授による基調講演「地域包括ケアシステムにおける高齢者トータルケア」の後、シンポジウム「山口県における高齢者トータルケアの取り組みと今後の展望」が行われ、岡 紳爾 山口県健康福祉部長が山口県の取り組み、中野加代子 宇部市健康福祉部長が宇部市の取り組みを、行政の立場から説明されました。宇部市は高齢者が自分の活躍できる場、生きがいを求める場を提供する「ちょこっと就労・活動・活躍」事業や「ご近所ふれあいサロン」、「はつらつポイント制度」、コンパクトシティによる「にぎわい・安心・利便性の高い生活の実現」等、いろいろな試みを開始していることがわかり、大変おもしろく聞かせていただきました。

今回紹介するのは、1940 年にオリヴィエ・メシアンが作曲した「世の終わりのための四重奏曲」です。第二次世界大戦でドイツ軍の捕虜となり、收容されていたゲルリッツの捕虜收容所で作曲、初演されたという劇的な生い立ちの作品です。曲想は『ヨハネの黙示録』10 章 6・7 節から靈感を得て作曲されたとのこと。捕虜收容所で出会った 3 人の演奏家と自分自身のために書き

上げたためにヴァイオリン、クラリネット、チェロ、ピアノという特殊な楽器編成となっています。しかし、題名から創造されるような悲劇的な曲ではなく、イエスの永遠性と不滅性を賛美した作品となっています。曲は次の 8 楽章からなっています。第 1 楽章「水晶の典礼」、第 2 楽章「世の終わりを告げる天使のためのヴォカリーズ」、第 3 楽章「鳥たちの深淵」、第 4 楽章「間奏曲」、第 5 楽章「イエスの永遠性への賛歌」、第 6 楽章「7 つのトランペットのための狂乱の踊り」、第 7 楽章「世の終わりを告げる天使のための虹の混乱」、第 8 楽章「イエスの不滅性への賛歌」。私が最初にこの曲を聴いたのは、日本コロムビアのパルナス 1000 シリーズ、フランスのムジ・ディスク原盤の LP です。メシアン本人の他、初演メンバーの一人であるチェロ奏者のエティエンヌ・パスキエが参加している、今考えると、とてつもない貴重盤でした。この LP でこの曲に魅せられたのですが、その後聴いたアンサンブル「タッシ」の演奏には正直、脱帽しました。73 年に結成された現代音楽アンサンブル「タッシ」は、ピーター・ゼルキンをはじめとする当時の気鋭の演奏家がこの現代音楽の名作を演奏する目的で結成されたのです。したがって彼らの演奏には何々ならぬ意気込みと思入れが込められており、まさにこの作品を世界に知らしめた 1 枚でもあります。

多くの先生方にご加入頂いております！		詳しい内容は、下記お問合せ先にご照会ください	
お申し込みは 随時 受付中です	医師賠償責任保険	取扱代理店	山福株式会社 TEL 083-922-2551
	所得補償保険	引受保険会社	損害保険ジャパン 日本興亜株式会社 山口支店法人支社 TEL 083-924-3005
	団体長期障害所得補償保険		
	傷害保険		
		 損保ジャパン日本興亜	